「法華コモンズ仏教学林」第8号　　2022年2月7日

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局
192-0051　東京都八王子市元本郷町 1-1-9　善龍寺内　FAX 番号 ⇒ 042-627-7227
ブログ　https://hokke-commons.jp　／メールアドレス　hokkecommons@gmail.com

巻頭言

中世の日蓮聖人霊跡―佐渡への参詣点描―

立正大学仏教学部教授・当学林教学委員　**寺尾　英智**

日蓮聖人に縁のある地は、後世の人々から聖人の事跡を直接伝える特別な場所として認識された。いわゆる聖人の霊跡である。令和三年には、文永八年（一二七〇）の佐渡流罪から七百五十周年を迎えた。佐渡流罪への路の顕彰や、新潟県立歴史博物館・山梨県立博物館で開催された特別展「日蓮聖人と法華文化」など、改めて佐渡の聖人について注目されている。そこで、霊跡の成立を考える一助として、中世における佐渡への参詣を点描してみよう。

佐渡の霊跡参拝は、早くも聖人の孫弟子である日像の事跡が知られる。日像は、永仁二年（一二九四）上洛するに当たり、その途次で聖人の霊跡を巡拝し佐渡も参拝したという。この説は、享保十五年（一七三〇）の日潮『本化別頭仏祖統紀』をはじめ、宝暦十二年（一七六二）の日塔『伝灯余光』や日鷹（一七五七～一八二四）の『龍華年譜』など、江戸時代に編纂された日像伝・寺院縁起に見えるが、根拠が示されたものではない。日像の参詣については、中世に遡る直接的な資料を見出しがたい。

具体的な参詣を知ることができるのは、行学院日朝である。日朝は、室町時代を代表する学僧の一人で、身延久遠寺十一世として活躍したことで知られる。嘉吉二年（一四四二）八月、二十一歳の日朝は佐渡の霊跡を参拝した。聖人が寺泊から乗船して松ヶ崎に着いたとの言い伝えに従い、日朝も同様の行程を取り、着岸したその日のうちに塚原へ到着している。次いで一谷にも参拝する。一谷には、聖人居住の跡を伝える一間ばかりの小堂があった。また、一谷の山の尾根には、御袈裟懸の松という一本の木があった。聖人が一谷に住まわれていた間、常にこの木に登り諸天に読経したという謂れを、地元で聞いている。日朝は、これらのことを文明十年（一四七八）に著した『元祖化導記』に記した。佐渡への参拝は、鏡澄と称していた日朝が、武蔵国川越の天台宗仙波檀林で研鑽に励んでいた時代のことであった。佐渡着岸の地が松ヶ崎であること、袈裟懸松の逸話は、いずれも日澄『日蓮聖人註画讃』にも記載される。日朝の記述は、これらの事項が『註画讃』より遡り、現地で伝えられていたことを示すものとして、貴重な証言ともなっている。

日朝と同時期、妙高院日意も佐渡に参詣している。日意は、平賀本土寺九世として上総・下総に新たな末寺を開き、古河公方に三度奏聞するなどした。日朝の一歳年長で、仙波檀林では同学であった。

塚原根本寺・三昧堂

寺尾　英智　先生

佐渡参詣は、本土寺住持となる前の文安四年（一四四七）のことであった。日晴『平賀本土寺継図次第』の記述によれば、同年二月、日意は江戸で浄土宗僧と問答（宗論）を行い、「佐渡国へ御参詣」した後、足利学校にて学問研鑽したという。御参詣と記されるように、佐渡行きは聖人霊跡を拝することが目的であった。『継図次第』には、参詣した具体的な場所や様子などは記されていない。しかしながら、日晴は日意に随順した弟子であったから、同書の記事は信頼できる。日朝と日意の間には、交流があったことが知られるから、或いは佐渡の霊跡についても話題に上ったことがあったのではなかろうか。

この後、佐渡の霊跡を参拝し、その感慨を書き残したのは、仏性院日奥である。日奥は、豊臣秀吉の東山大仏千僧供養会出仕の命を拒み、文禄四年（一五九五）九月、住持であった京都妙覚寺を出寺した。そうした中で慶長四年（一五九九）閏三月中旬、佐渡に参詣した。佐渡の厳しい自然を目の当たりにして「高祖四箇年の御艱難これを想像し、感涙しばしば下る」中、聖人の恩徳に思いを致して直ちに帰京することができず、塚原で三七日（二十一日）の間室内に籠もり、昼夜にわたり法味を捧げたのである（『奥聖鑑抜萃』）。塚原は、師の日典が復興に尽力した霊跡でもあった。日奥に先立つ同二年（一五九七）四月には、やはり供養会出仕を拒んで本国寺を隠居した究竟院日禎も、佐渡の霊跡を参拝していた（日禎曼荼羅本尊）。

佐渡では、日興の門流が早くから展開したことが知られる。佐渡を新たな弘通の地とした門流もある。日朝・日意と同時代に活躍した久遠成院日親は、広く各地に弘通して寺院を建立したが、佐渡もその一つであった（日親『埴谷抄』）。その一方で、日朝と日意の事例は、この時代に既に佐渡が参詣すべき霊跡の地として認識されていたことを示している。

付記　一谷の霊跡として知られる妙照寺は、不慮の火災により令和三年十二月六日に諸堂を焼失した。霊跡の復興に魔障なきことを祈念するものである。

実相寺・袈裟懸け松

講義報告

仏教哲学再考
―『八宗綱要』を手掛かりに―③

末木文美士　先生

報告　佐古　弘純

日本仏教研究の第一人者であり、数多くの功績をのこされている末木文美士先生による連続講座「仏教哲学再考―『八宗綱要』を手掛かりに③」後期講座が開催されました。

本講座は、末木先生の講義概要に、「講読という形ではなく、本書を手掛かりとしつつも、それに捉われずに、諸宗の教学を今日どのように受け止め、考えたらよいのか、応用的に問題を広げ、手探りして検討していきたい」とある通り、末木先生の哲学的な見解や、最先端の研究を踏まえながら講義して下さるため、日本の仏教を深く理解したい方にとっては大変貴重な講義になっております。以下、御報告いたします。

第一回目の講義は、大乗の根本であり『八宗綱要』の山場となる、テキスト第六章「天台宗」から開始されました。

はじめに、章安大師灌頂以降、天台大師智顗自身の多面的な側面が図式化され、さらに簡素化した『八宗綱要』における「天台宗」の解説は、整理がついているように見えるが、「天台宗」の正しい理解とはいえないことを前提にしなければならない、と指摘されました。テキストに入り、「天台宗の宗名と経論」では、智顗自身は『法華経』を特別視していたわけではないことを示した後、「天台宗の歴史」を広範囲に見ていきました。「五時八教」では、五時（乳・酪・生酥・熟酥・醍醐）と化法の四教（蔵・通・別・円）と化儀の四教（頓・漸・

秘密・不定）の関連性を詳細に説明し、「蔵・通・別・円」に関してそれぞれテキストの図表を用いながら読み解き、「化法の四教」と「四土」と「仏身」の関係を解説され、テキストは「化法の四教」が中心となって展開していることを明らかにされました。実践面である「一心三観・四種三昧」では、テキストに具体的な解説はなく、軽い捉え方であることが凝然自身の天台宗の理解だった、と指摘されました。続いて、「法華経の捉え方」として、舎利信仰よりも経典信仰（経典を如来と見る）となることを示した後、地獄から仏まで含む十界互具の構造の意義を哲学的視点から論じられました。さらには、念仏と題目の共通性についてふれられ、『選択集』で「念仏」は難易義より勝劣義によって選択されていること、また機法一体（衆生と仏が名号で出会う）としている西山派（証空）の思想には十界互具の構造がみえることなど、先生独自の視点から解説され、テキスト読了となりました。

第二回目の講義は、テキスト第六章「天台宗」を深く掘り下げ、「止観の系譜」と「『大乗起信論』の思想系譜」の二章に分けて講義されました。

「止観の系譜」では禅観思想をとりあげ、精神統一をして対象を観察する観法から、仏を対象に観ずる観仏へと変化していったことを明らかにされました。また、禅宗の禅観は、既定の座禅法を否定していく教えである、と指摘されました。次に、「『大乗起信論』の思想系譜」では、『大乗起信論』に説かれる認識論から、新たな思想を生み出していく生成論として発展していったことを確認し、『大乗起信論』においては、真如（如来蔵）と無明が和合して阿頼耶識となり、真如（如来蔵）自体に随縁のはたらきはない、と説明されました。続いて、華厳の系譜（杜順・智儼・法蔵・澄観・宗密）である法蔵と宗密に焦点をあてました。法蔵『起信論義記』においては、真如自体に随縁と不変をたて、随縁真如を如来蔵、不変真如を真如門としていることを示したのち、真如と無明の関係性を具体的に解説されました。さらに、法蔵『華厳経探玄記』の華厳教判において、如来蔵縁起がどう位置づけられるのか、宗密『円覚経略疏』における真如縁起についてなど、詳細に説示され、思想転換の流れを見ていきました。最後に、「『釈摩訶衍論』の問題」では、『釈摩訶衍論』に説かれる十六能入門・十六所入門・不二摩訶衍の三十三種差別について解説し、講義終了となりました。

第三回目の講義は、「日本天台宗を考える」をテーマに、「最澄の理想」「安然による密教化」「山家・山外と性善・性悪」の三章にわけて講義されました。

「最澄の理想」では、大乗戒における菩薩の問題として、最澄と徳一の「一乗三乗論争」をとりあげ、その論点は「菩薩とは何なのか」ということだったのではないか、と独自の見解を述べられました。続いて、最澄の『山家学生式』にある、理想とする国のありかたを明かす六条式（照千一隅の文）と、なぜ大乗戒を採用したかを明かす四条式（真俗一貫の文）を読み解き、在家と出家が大乗戒によって共に菩薩になりえるとしたことで、互いに協力しあうことが最澄の理想であり、さらに最澄はその後、『法華経』を絶対化していくことになる、と解説されました。「安然による密教化」では、安然は天台の密教を完成させ、本覚思想の原型をつくり大きな役割を果たした、と説明されました。安然の密教は、理論的な関連からいくと空海と深く関わっており、空海批判から安然独自の思想を築いていったことを指摘されました。共通点として、二人が『釈摩訶衍論』を重要視していることを示し、さらに二人の大きく異なる要点として、空海の『十住心論』（段階的・差別化）と安然の『教時義』（四一教判・すべてが真如であり平等）を比較し、それぞれの『釈摩訶衍論』（十識説）の捉え方の違いを解説されました。「山家・山外と性善・性悪」では、山外派の性善説は、止観を実践する場合は現実的として捉えることができるが、「十界互具」においてはやはり山家派の性悪説の方が人間観としては優れている、とされました。さらに、安然は性善説・性悪説の両方の思想が含まれているのではないか、と論じられ講義終了となりました。

本講座は、末木先生の明解な講義に加え、毎回高度な質問が飛び交う最高峰の学び場となっております。次回は、二月五日（土）に後期講座第四回目が開催されます。是非、ご聴講下さい。

末木文美士　先生

講義報告　法華仏教講座

第一回　川﨑弘志 先生　講義

第二回　木村中一 先生　講義

第三回　宮田幸一 先生　講義

報告　布施 義高

西山 明仁

「法華仏教講座」は、法華コモンズの前身・本化ネットワーク研究会の講義形式を踏襲した講座で、毎年

度後期・月一回（原則土曜日開催）午後四時半～二時間の枠に、斯界で注目される学者・研究者を毎回交代制で講師にお迎え申し上げている。

令和三年度後期は、第一回（令和三年（以下同）一〇月）＝川﨑弘志先生、第二回（一一月）＝木村中一先生、第三回（一二月）＝宮田幸一先生、第四回（令和四年〈以下同〉一月）＝西山茂先生、第五回（二月）＝大竹晋先生、第六回（三月）＝花野充道先生に講師としてご登壇頂けることとなった。今回も大変豪華な顔ぶれである。以下、ここでは、第一回～第三回までの講義報告を行いたい。

川﨑弘志　先生

第一回講義は、令和三年一〇月二日（土）、川﨑弘志先生を講師にお招きして執り行われた。九月三〇日に緊急事態宣言が解除され、久々に常圓寺様祖師堂（三階会議室）を会場とした対面講義となった。

今回の川﨑先生のご講題は「台密における日蓮の血脈相承の系譜」。

先生が『法華仏教研究』第二八号（二〇一九年）で公表された同題論攷の内容に、その後の緻密な続編的考察を加えた形の貴重なご講義であった。『不動愛染感見記』に記される大日如来～日蓮聖人の嫡々二十三代相承系譜の精査に主眼が置かれ、膨大な時間と労力を注いで到達された研究成果を、当日の受講者に惜しみなく披露してくださった。

先行研究となる山川智応博士や山中喜八博士の説、また、『理性院血脈』をめぐる戸頃重基・高木豊両博士、山口晃一氏の所見などを四方八方から吟味、再検討され、更に厖大な資料を精査された上で辿り着かれたご自身のご見解を示されるという、圧巻の二時間であった（なお、今回の貴重なご報告は、遠からず論文として公表されるご予定とのこと）。

膨大な資料をPowerPointで示しながら、要点を分かりやすく解説され、スピード感と明快さに満ちた素晴らしいご講義であった。

当日は、緊急事態宣言が解除された直後にも関わらず、多くのハイレベルな学識を有する聴講者が会場へお越しになった。講義終了後、かなり深い次元での活発な質疑応答がなされ、法華コモンズらしい有意義な時間を共有させて頂けたことに、無上の喜びを感じた次第である。

（以上、布施義高記）

第二回は、令和三年一一月二七日（土）木村中一先生による「近世における日蓮聖人遺文の編纂を考える」。木村先生の専攻は主に日本仏教、日蓮教団史、日蓮聖人遺文研究。これまでに多くの優れた研究論文を発表されている。

はじめに日蓮聖人滅後、日蓮聖人の書かれたご遺文が、弟子檀越を中心にどのように継承されてきたのか。その継承の歴史を「遺文継承史」と称し、その上で「編年体遺文目録」の種類とその受容、また後世に与えた影響などについて詳しくご講義いただいた。

まず代表的な編年体御書目録として『御書新目録』など4点を挙げて、各目録の特徴について詳細にご説明。続けて勇猛院日麟『祖書編輯考』による『録内御書』の日蓮聖人一周忌成立説否定を、日蓮遺文編纂史上における新たな局面の到来を示した一例と指摘された。また深見要言、小川泰堂ら在家者による日蓮遺文編纂もまた、日蓮遺文編纂史上における新局面と指摘された。

最後に木村先生は、日蓮聖人滅後、約四〇〇年が経過した近世に至ると「編年体御書目録」が成立、これにより日蓮遺文が年代順に整理され、読者は日蓮遺文の文言を通じて、日蓮聖人の生涯や思想を「追体験」することが可能となった。ここに日蓮遺文の歴史的展開としての「日蓮遺文の編年化」は、日蓮遺文継承史上における新たな局面を迎えたのである、と結論を述べられた。

講座でご紹介いただいた資料は、木村先生ご自身が調査、実見されたもので、聴講者一同は貴重な資料の解説に興味深く聞き入っていた。

木村中一　先生

第三回は、令和三年一二月四日（土）宮田幸一先生による「『観心本尊抄』本尊段の本尊と「本門本尊」との関係について」。宮田先生は、創価大学文学部教授など、多くの要職を歴任され現在は創価大学名誉教授。『観心本尊抄』の本尊段に説かれる説示と、「本門本尊」との関係について詳細にご説明いただいた。

最初に「本尊」「曼荼羅」の用語とその意義につい

て、行学院日朝の解釈について触れ、続いて慶林坊日隆『観心本尊抄文段』の「能生、所生」のタームに着目。関連する日隆の上行＝日蓮＝本因妙とする思想と、富士門流の大石寺九世日有以降の本因妙思想との関係について言及された。

次に『観心本尊抄』の「本尊」の用語について、「一閻浮提第一の本尊」は「本門寿量品の本尊」とは違うとした上で、『観心本尊抄』を好意的に末法修行論として整合的に理解しようとすると、本尊段に説かれる「本尊に唱題する」という修行が勧められていることは、他の信頼できる御書に明らかである、と『本尊問答抄』などの御書の説示を例に挙げ説明された。

最後に「本門の本尊」と言う場合、文脈によって大曼荼羅（本尊段の本尊）と寿量の仏という二つの意味があり、『観心本尊抄』をどのように読むかによって意味が異なる。日蓮聖人滅後における仏本尊・法本尊をめぐる論争は、日蓮聖人が「本門の本尊」について明確な説示をなされなかったためである、と述べられ重厚かつ濃密な講義を終えられた。

宮田先生は、ときに自身の体験やユーモアを交え明快に語られ、講義終了後は、オンライン・対面の各受講者から熱心な質問が寄せられて、一人一人に丁寧に回答された。

（以上、西山明仁記）

宮田幸一　先生

講義報告

菊地　大樹　先生

歴史から考える日本仏教 ⑧

裏から読む鎌倉時代

―日蓮遺文紙背文書の世界―

報告　澁澤　光紀

連続講座シリーズ「歴史から考える日本仏教」は第八期目を迎えて、今回は「裏から読む鎌倉時代―日蓮遺文紙背文書の世界」をご講義いただきました。

「紙背文書」とは、紙が貴重だった時代に、反古紙として捨てるはずの手紙や事務書類の裏面を活かしてノート用などに使ったため、偶然に残った文書のことです。千葉氏の有力な事務官僚だった富木常忍が、手元に残った大量の反古紙を日蓮聖人に提供し、聖人がそれに「天台肝要文」「双紙要文」「破禅宗」「秘書要文」を書き残したものを「日蓮遺文紙背文書」と呼び、中山法華経寺に秘蔵されています。

この日蓮遺文の裏（本来は表）に書かれた当時の行政などにかかわる文書からは、「日蓮聖人の生きた時代の社会の息吹きが生き生きと感じられ（講義概容）」るほどに、大変貴重な歴史史料となっています。本講義では、テキストの『千葉県の歴史』資料編・中世2に掲載されている紙背文書を読み解きながら、中世鎌倉の武士の有様を学んでいきます。全五講のうち既に四講が終了していますので、その概容を報告いたします。

第1講（一〇月一九日）は「日蓮遺文紙背文書」とはなんだろう」との題で、初心者にも分かる詳しい説明をして頂きました。残るはずのなかった書状などから、当時の人が伝えようと思わなかった生活や社会などの歴史の側面が読み取れることで、紙背文書はここ数十年で注目されるようになったとのこと。「日蓮遺文紙背文書」は、中尾堯編『中山法華経寺史料』でほぼ全部を翻刻紹介（一九六八）。中尾堯編「日蓮聖人御真蹟―中山法華経寺聖教殿所蔵―」で原本の形状まであわせて影印の形で復元出版されています。

第2講（一一月一六日）「日蓮と富木氏・八幡荘」では、紙背文書からうかがえる当時の日蓮聖人周辺の世界や、なぜ富木氏は犠牲を払ってまで日蓮聖人を保護したのかなどについて講義されました。レジュメに沿ってその内容を簡単に報告します。

富木氏と日蓮の出会いについて、六浦上行寺伝に「六浦と下総をむすぶ船中で会って問答のすえに常忍が帰依した」とあり、「天台肝要文」から日蓮聖人は建長五年には八幡荘若宮の富木氏周辺にいたと思われます。

富木氏の出自は因幡国富木郷の武士で、父・蓮忍の時に千葉氏に仕えて八幡荘若宮に移住。富木父子には、「目代」という国司の代理人の能力がありました。八幡荘「若宮」は、もと石清水八幡宮極楽寺の「葛飾八幡別宮」と見られ、千葉氏被官の富木・太田・曽谷などが荘内の郷での代官職を勤めていました。領主にとって僧俗が集まる「談議所」を領内に持つのは経済的メリットがあり、常忍はそのことも踏まえて聖教格護とともに、談議所としても法華経寺を運営したようです。

第3講（一二月一六日）では、「千葉氏の活動と京・鎌

菊地大樹　先生

倉・鎮西」をテーマにして、日本六十六ヶ国の三ヶ国の守護職で北条氏に次ぐ有力御家人だった千葉氏について、その領内での活動を中心に話されました。

千葉氏は、幕府に「宮御方侍」を命じられ京の内裏造営の仕事を担当したり、鎌倉に常住する鎌倉中としての都市整備や警備の役、また最も重要な役の一つの「垸飯（おうばん）」（正月の将軍への饗応行事）役などで、大きな資金力を必要としました。「長専奉書（『秘書要文』）」からは、富木常忍の下で垸飯の準備に奔走する金融業者・法橋長専の様子がわかり、有力御家人である千葉氏の活躍の舞台裏（家政事情）がうかがえます。

第4講（一月一八日）の「日蓮をとりまく金融経済の世界」では、紙背文書から見えて来る千葉氏のような数か国の守護を勤める大御家人の経済事情や、そうした中世の金融経済の中で、宗教者や宗教施設の果たした役割に注目してのご講義を頂きました。

中世の金融業（者）のことを「借上」といい、鎌倉時代には「借上」が発達して、武士貴族の活動から年貢の弁済まで広く融資を展開していたとのことで、千葉氏は「垸飯」役でも所領からの収入では足らずに金融業からの借金で賄ったようです。また京都大番役でも、「替銭」という手形を振り出して勤めたとのことです。

また日蓮・鎌倉仏教と金融経済の関係として、寺院は資本が集中し蓄積する場所なので、領主側にとっても擁護する価値があり、千葉氏の家政を担った富木常忍が日蓮聖人を保護したのは、信心のみならず領内の拠点としての寺院・談議所の要となる学僧だと判断したからではないだろうか、と述べられました。

最終回の第5講は「日蓮をとりまく百姓の世界」です。また来期の四月からは「歴史から考える日本仏教」の第九期目として「法華持経者の思想的系譜」が始まります。引き続きのご聴講を宜しくお願いいたします。

講義報告

『法華経』『法華文句』講義

菅野　博史　先生

編集部

本年度後期一〇月からの講義は、久々に対面でスタートすることが出来ました。やはり対面での講義は緊張感があり、菅野先生の声も活き活きしたライブ感が感じられ、講義内容が頭に入りやすい気分になります。

このままコロナ禍も終息するかと思われたのですが、残念ながら新年に入ってのO株の感染爆発により、また一月はオンライン講義に戻ることになりました。それでも三度の対面講義と動画配信が出来たことは幸いでした。では、その講義報告をしていきます。

復習すると九月の講義では、『方便品』の十如是のところを講義して頂き、テキストでは『法華文句（Ⅱ）』の四二九頁の最後「経に「唯仏与仏乃能究尽」と云うが故に、位を用て釈するなり」までした。

後期の十月講義は通算で四十一回目となります。テキストは四三〇頁の初め～四三七頁の最後まで、前回の「正しく広く権実の相を釈す」の続きとなり、十如是を四段階（「十法界」「仏法界」「離合」「位」）によって釈していく内容を中心に講義されました。

菅野博史　先生

科文分けでは「十法界に約して釈す」、「仏法界に約して釈す」、「離合に約して釈す」、「位に約して釈す」、「正しく十如を釈す」、「重ねて究竟等を釈す」、「三徳本末不二を釈す」、「重ねて究竟等不二を釈す」、「不可議を釈す」となります。

十一月二十九日の講義は、テキスト四三八頁の「偈に二十一行有りて～」から始まり、四四五頁の終わりまで、偈文の解釈となります。偈文の随文釈義は、長行との対応関係を示しながら、煩瑣なほどに詳しく解説していくので頭が混乱しますが、レジュメにはその偈頌と長行の対応がこれも細かく丁寧に示されています。

科文では、二十一行の偈頌を「長行を頌す（十七行半）」と「開三顕一、動執生疑（三行半）」に分け、その後の「爾時大衆中～」からを「執動じて疑を生じ、疑を謄げて請を致す」としています。菅野先生はこの「執を動じて疑いを生ず」に関して、「舎利弗たちが仏の言葉に疑いを生じたという切実さを理解しないと、方便品の面白さは分からないのではないか」と指摘されました。

十二月二十日の講義は、経文では「爾の時に舎利弗は四衆の心の疑いを知り～」から、テキストは四四六頁からで、科文は「開三顕一、動執生疑」に続いての「疑を叙す」「正しく請決するを明かす」になります。「爾の時に舎利弗～」からは三止三請の第一請で、第一止は『方便品』最初の「止舎利弗、不須復説」がそれです。三止三請が終わっての「爾時世尊告舎利弗～」からは広開三顕一です。これを十義で解釈して、第一の「通別を明かす」で、三周説法のうち「法説周」からの解釈に入りました。講義は、十義の第二「有声聞・無声聞を明かす」の段までを詳しく読解して終了しました。

次回は、二〇二二年一月三十一日で、テキストは四五四頁の一行目からで、オンライン講義になります。

法華コモンズ仏教学林　前期講座一覧

2022（令和4）年度前期講座　開講：4月～9月

《　対面講義が不可の場合は、開催日時でのオンライン講義、または講義動画配信にて開講します　》

連続講座 **「仏教哲学再考―『八宗綱要』を手掛かりに④」**　　講師：末木文美士　先生

第13回　5月14日　／　第14回　6月 4日　／　第15回　7月 2日　／　第16回　8月 6日

※日時は、土曜日の午後4時 30 分～6 時 30 分　　※全回オンライン実況での講義となります（対面なし）。

【受講料】1 期 4 回分 10,000 円　／【教　材】鎌田茂雄全訳注『八宗綱要』（講談社学術文庫）

シリーズ講座 **「法華仏教講座」全６回**　　※日時は、土曜日の午後4時 30 分～6 時 30 分

第1回　4月　9日　「天台と三論　―久遠実成を考える―」　　講師：村上明也　先生

第2回　5月　7日　「最澄・徳一論争と、その後の展開」（オンライン講義）　講師：師　茂樹　先生

第3回　6月25日　「法華御籤の成立と展開」　　講師：芹澤寛隆　先生

第4回　7月30日　「堅樹院日寛教学をめぐって」　　講師：水谷進良　先生

第5回　8月27日　「『開目抄』再考」　　講師：都守基一　先生

第6回　9月10日　「日蓮教学における教観論と種脱論」　　講師：花野充道　先生

【受講料】　12,000 円（全６回の講義分）※当日１回の受講料は 3,000 円

歴史から考える日本仏教⑨　「法華持経者の思想的系譜」

※原則火曜日、午後６時 30 分～8 時 30 分（特別講義は土曜日の３時間）　　講師：菊地大樹　先生

第1講　4月19日「山林修行と持経者」　／ 第3講　6月21日「持経者から日蓮へ―密教をめぐる問題」

第2講　5月17日「持経者としての後白河院の宗教世界」／ 第4講　7月19日「南都堂衆の活動と持経者」

特別講義　9 月 17 日（土）　「対談：法華経の行者か、持経者か―間宮啓壬先生をお迎えして」

午後 4 時 30 分～7 時 30 分　　【受講料】全５回 10,000 円 /1 回 3,000 円（特別講義も同様）

『法華経』『法華文句』講義　　講師：菅野博史　先生

※原則　第４月曜日　　午後6時 30 分～8 時 30 分

第１回　4月25日　／　第２回　5月30日　／　第３回　6月27日

第４回　7月25日　／　第５回　8月29日　／　第６回　9月26日

【受講料】　12,000 円（全６回分の講義分）※当日１回の受講料は 3,000 円

【教　材】　『法華文句』Ⅰ～Ⅳ（第三文明社、各冊 2,530 円のところ、受付にて割引 2,000 円で頒布）

【会場】新宿常円寺　祖師堂地階ホール　新宿区西新宿 7-12-5　電話 03-3371-1797（寺務所）

【申込】受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付　⇒ FAX：042-627-7227

mail：hokkecommons@gmail.com　／　ブログ：https://hokke-commons.jp/

192-0051 八王子市元本郷町 1-1-9　善龍寺内　**法華コモンズ仏教学林　事務局**

賛助会員一覧（敬称略）

個人会員　※1口　一万円

6口　小松　正学
6口　松原　勝英
6口　中野　顕昭
6口　椿澤　舜玄
6口　村上　東俊
5口　鈴木　正厳
3口　持田　貫信
3口　竹内　敬雅
※　匿名　希望
2口　菅野　博史
2口　西山　英仁
1口　覚藏寺
1口　長谷川正浩
1口　互井　観章
1口　菊地　大樹
1口　西山　茂
1口　澁澤　光紀

法人会員　※1口　五万円

3口　本國寺
2口　持法寺
2口　本妙寺
2口　大久寺
2口　東洋哲学研究所
2口　善龍寺
1口　摩耶寺
1口　天龍寺　（以上）

特別支援団体

本多日生記念財団　18万円

※本多日生記念財団様からは、本学林の前身となる本化ネットワーク研究会の時代から、毎年継続して多額のご支援を頂いております。

●皆さまのご賛助・ご支援に篤く感謝いたします

年間賛助会員加入のお願い

【年間賛助会員　加入申込み】

○　個　人　会　員　－　年間1口（1万円）

○　法人・団体会員　－　年間1口（5万円）

《特典》

●個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を授与。

●法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を授与。

●表紙上・枠内のメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

★　個人か法人か、また何口かを明記する。

★　名前、年齢、住所、電話、ファックス　またメールアドレスを明記する。

●直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて連絡欄に必要事項をご記入の上、左記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】　法華コモンズ仏教学林

【口座番号】　00150-7-634712

どうぞ宜しくお願い申し上げます。

「講座映像版」「書籍」販売のお知ら

■次の講座の講座映像版（ダウンロード版とDVD版）を頒布しています。

○菊地大樹先生「『吾妻鏡』と鎌倉仏教」6回

○池上要靖先生「初期仏教研究」6回

○菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

①鎌倉時代を射程にいれて　②《顕密問題》を考える

③日本宗教史の名著を読む　④鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

◎ダウンロード版：価格一万二千円（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジュメPDF

◎DVD版：価格一万二千五百円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジュメ印刷物

◆詳細はブログ（https://hokke-commons.jp）参照。

■次の書籍を頒布しています。お申込み下さい。

【本化ネットワーク叢書】頒価　一冊二千円＋送料

○叢書(2)　『「九識説」とは何か』

○叢書(3)　『本門戒壇論の展開』

法華コモンズ通信　第8号

○発行日　2022（令和4）年2月7日

○編集発行　法華コモンズ仏教学林

○発行所　法華コモンズ仏教学林　事務局

一九二-〇〇五一　東京都八王子市元本郷町一-一-九

【FAX】042（627）7227